

世界最初の鉄道である延長四〇キロメートルのストックトン・アンド・ダーリントン鉄道が一八二五年に営業を開始して以来、イギリスは多数の路線が一気に敷設される鉄道爆発時代に突入した。ところが当時の社会には鉄道以上に高速の情報伝達手段は存在しなかったため、強盗などの犯人が鉄道で逃亡すると完全な高飛びに成功するという問題が発生した。

しかし、高飛び時代の終焉を明示する事件が一八四五年に登場した。ロンドンのパディントン駅に有線電信で、郊外のスラウで発生した殺人事件の犯人が列車でパディントン駅へ出発したという内容の電信が到達した。この電信により犯人は列車の到着とともに逮捕され、社会は鉄道より高速の通信手段が存在することを理解した。

海上でも交通と通信の新規の関係が発生した。イギリスで仕事をしていたアメリカの医師H・H・クリッペンが一九一〇年に夫人を殺害し、愛人とブリュッセルから客船でケベックを目指した。船上の二人は逃亡成功と安堵したが、客船の船長が二人を問題の人物と見抜き、洋上から無線通信でイギリスの警察に連絡した。

この情報を受信したイギリスの主任警部W・デューは直後にリヴァプールから高速の汽船で先回りしてケベックで待機し、二人が乗船した客船が到着したときに船内で逮捕した。世間は無線通信の威力を認識すると同時に、暗号にされていない船長と警部の洋上での交信は世界で傍受され、一躍有名な事件になった。

これらは情報通信技術の初期の段階の事例であるが、インターネットが登場して問題は複雑になった。インターネットで一日に送信されるメールが最近では三五〇〇億通程度あり、八割は迷惑メールとされる。そのために使用される情報資源も無視できないが、フィルターを通過してくる迷惑メールも時間とともに増大している。

さらに社会を複雑にしているのが人工知能である。ある国家元首が他国の国家元首と画像通信で対談したところ、相手は人工知能が作成した画像と音声であったという事件が発生しているが、それを一般の人々が利用できるようにしたのがチャットGPTに代表される人工知能を利用して文章や画像を生成するソフトウェアである。

すでにチャットGPTの利用者数は一日に約一億人になっているが、開発者側が想定していなかった利用が急増している。アメリカの大学では学生の提出論文がチャットGPTで作成される事例が増加しているし、日本でも医師の国家試験の問題を回答させたところ正解比率が五五%になったという事例もある。さらなる問題は意図した悪用である。中国ではチャットGPTが作成した偽物の地方政府の政策が流布され問題になったし、ランサムウェアやフィッシング詐欺をチャットGPTによって作成した事例も登場している。チャットGPTが公開されて数ヶ月後の現在でさえ、このような状況であるから、今後の悪用は想像できない。

しかし、冒頭に紹介した鉄道による高飛びや汽船による逃亡を阻止したのは有線電信や無線通信という異質の技術であったことを想起すると、人工知能技術の悪用も異質の技術が対応することが期待される。一九五六年にアメリカで開催されたダートマス会議が人工知能の発端であったとすれば、七〇年近くが経過した現在、新規の技術の登場は十分に可能である。